

# 天国の二つの門

## オペラ鑑賞とオペラ講座

2023/2/11



Mary Wollstonecraft 1759-1797 Olympe de Gouges 1748-1793 Marie-Antoinette 1755-1793

### ダブルブッキング

NHKのオペラ講座とお隣の愛知芸文センターでのオペラ上演の日時が重なりました。前日、講座の受講生からメールで、「明日の《さまよえるオランダ人》の講座、お休みします。藤原歌劇の《トスカ》を見に行きます。すみません」とわざわざ欠席の連絡がありました。「オペラ鑑賞、大歓迎です。楽しんでみてください」とご返事をだしておきました。このとき、天国の二つの門のお話を思い出しました。

### 天国の二つの門

天国へお行きなつた方はご存知でしょう、天国の入り口に大きな門が二つ立っています。一つには、「天国入り口」、もう一つには、「天国入門講座入り口」と書いてあります。入門講座入り口には、日本人とドイツ人が列んでいます。(笑い) これは、一時、日本とドイツが文化的に後進国であったことをイギリス人とフランス人がからかったお話です。日本とドイツは、この両国のように「産業革命」と「フランス革命」を体験していません。産業的・経済的にも、民主的にも遅れているからです。そして、文化的にも、遅れています。いまでは、ドイツは、産業的にも、経済的にも、政治的にも、社会的にも、文化的にも先進国のリーダです。天国への門は一つでいいのです。

### オペラの言葉の問題

さて、日本です。ここからはオペラの話です。一番、日本がオペラで遅れているのは、言

葉の問題です。優れたオペラには外国モノが多くて、イタリア語を初め、ドイツ語とフランス語が主です。母国語でオペラを観ながら、笑ったり、泣いたりしてイタリア人やドイツ人やフランス人を観ると羨ましくなります。ローマで、プッチーニの《蝶々夫人》を観たときには、観客のイタリア人の夫人がハンカチで眼を拭きながら、日本人のわたしたちを同情する目で見してくれたのを思い出します。こちらも、「どうも」と合図を送りました。《蝶々夫人》なら内容や台詞はまだよく分かるのですが、《ナブッコ》などのイタリア物は細部までは分かりません。特に、あの独立運動の時代のさまざまな出来事や言葉や歴史的な言葉は、まったく知らないままで観ています。これでは、本当にオペラを観たことにはなりません。

## オキシモロンと歴史の説明

以前、オーストラリアのアーミデールのニューイングランド大学へ交換教授として派遣されたときのことを思い出します。教授のみなさまや学生や一般の方たちの前で、モーツァルトの《魔笛》について講演したときに、「このときのパパゲーノの言葉は、修辞法で言う『オクシモロン』です。特に、シェイクスピアの「ロメオとジュリエット」にありますように、オクシモロンとは……」と「オクシモロン」(oxymoron)の説明をしようと思ったら、前列に座った教授のお一人が、「oxymoron については、ここでは小学生も学んで知っているから説明はいらないよ」といいました。そうでした。ここはイギリスなのです。これはたすかったとおもいました。一度に気が楽になりました。本筋だけ話をすれば、あとは余分な説明やオペラの仕来りやモーツァルトの啓蒙思想やフランス革命などについて話すことはないのです。おかげで、まとまったお話ができて大成功でした — とあとで担当の教授からいわれました。翌朝、教授たちの部屋の前を通ったら、同僚たちに電話で、「《魔笛》はフェミニズムオペラだって」という言葉が聞こえてきました。嬉しかったです。

さて、「oxymoron」とは、日本では、「撞着(どうちゃく)語法」や「形容矛盾」と言われる修辞技法の一つで、相矛盾する言葉を並べて強調する強調方です。例えば、「嬉しい悲鳴」や「急がば廻れ」や「負けるが勝ち」などです。シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』には、「美しい暴君！ 天使のような悪魔！ 鳩の羽をした烏(カラス)！ 狼のように貪欲な子羊！」(Juliet: Beautiful tyrant! fiend angelical! Dove-feather'd raven! wolvish-ravens lamb!) というのがあります。『マクベス』のなかの「きれいは汚い、汚いはきれい」もそうです。このような文体の説明が、日本では必要です。

さらに、日本では、歴史的な考察も必要です。例えば、《魔笛》が初演された 1791 年です。モーツァルトが亡くなった年ですが、フランスの劇作家で女優のマリー・オランプド・グーシュが『女性および女性市民の権利宣言』(女権宣言・英: Declaration of the Rights of Woman and of the Female Citizen) を書いて発表した年でもあります。また、その翌年の 1792 年には、イギリスの社会思想家のメアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』を執筆出版しました。この二人とも、フェミニズム運動の先駆者です。また、「パンがなければケーキを食べればいいじゃない」といったフランスの女王のマリー・アントワネットです。この言葉は、イエスの「人はパンのみにより生きるにあらず」を借りたものです。1791 年に国王一家は、自国フランスとフランス人を見捨て、庶民に変装して馬車に乗り国外脱出を図ります。国境近くのヴァレンヌで身元が発覚してパリへ連れ戻されます。この「ヴァレンヌ事件」により、国王一家は親国王派の国民からも見離されてしまい、国王と王妃は、その二年後の 1793 年にパリの中心地の「革命広場」(いまのコンコルド【調和・協調】広場)でギロチンで首を刎ねられます。でも、このことは、オーストラリアの大学では三人の名前を言うだけで、彼女らの業績や著者や歴史的役割について話す必要はありません。「《魔笛》は 1791 年に初演された歴史的に冠たるフェミニズム・オペラです。モーツァルトは、男たちに対抗したメアリ・ウルストンクラフトであり、マ

リー・オランプド・グーシュであり、マリー・アントワネットの身方であります」(拍手) といえは成りました。

## オペラ講座は必要です

さて、オペラ講座です。天国に二つの門があるように、オペラにも二つの門が必要です。実際にオペラを観に行く前に、《さまよえるオランダ人》についてのオペラ講座を聞いておくことは必要です。特に、最近のオペラの演出は複雑で難解です。もともと、オリジナルのオペラの原作が分からないのに、そのまた、「パロディ」である新演出はなおさら分かりません。拍手は元より、ブーイングの出しようもありません。まず、《オランダ人》(初演 1843)は、ドイツ的ロマン・オペラです。ロマン・オペラの先駆的作品であるウェーバーの《魔弾の射手》(初演 1821)を意識して書いたワーグナーの新作ロマン・オペラです。この二つは、ドイツ・オペラ史において欠かすことの出来ない二作品です。特に、《オランダ人》は、ワーグナーの若書きオペラでもあるのであまり高く評価されませんが、もっと見なおされていい作品です — と知っておくことは大事です。そして、《オランダ人》が初演された 1843 年は、反動的なギゾー内閣に対してパリ市民が武装蜂起したフランスの「二月革命」(1848 年)の前夜です。このオペラには、貿易商のダーラントの紡績工場が女性の職業の場であり、教育の場であり、市民の憩いの場であったように、そういったブルジョアジーの精神が満ち満ちています。そして、NHKのオペラ講座で用いた《オランダ人》の映像は 1985 年のバイロイト祝祭歌劇場盤です。演出はハリー・クプファです。クプファの演出は、先のホームページ「一読百解Ⅲ」の「2022/12/21 オランダ人批判・優れたロマン劇か 愛なき幻想劇か」で述べたように、極めて現代的で否定的なものです。なぜ、こういった演出が、わざわざワーグナーの本拠地のバイロイト祝祭劇場でなされるのかも、説明する必要があります。演出家クプファは、ヒロインのゼンタが、オランダ人を愛していず、ただ、憐れんで、同情の気持ちでオランダ人を救ったと見なしたのです。そして、そんな中世的な「慈悲」の宗教観をもつ「愛」のないゼンタを嫌って、町の人たちは、飛び降りて死んだゼンタの遺体に対して拒否反応を示すために、一斉に家の窓を大きな音を立てて閉めたのです。さて、以上のことをオペラ講座で学んだみなさまは、このクプファ演出を、拍手で迎えるか、ブーイングで見送るか、どちらでしょうか？

【都築正道】

